

論文審査の要旨

報告番号	乙 第 2856 号	氏名	長村 蔵人
論文審査担当者	主査 小風 暁 教授 副査 小林 真一 教授 副査 中館 俊夫 教授		
(論文審査の要旨)			
<p>接触皮膚炎を生じる外用薬について、薬剤毎の集積はなされてきたが、長期間の1施設での検討結果は報告されていない。</p> <p>外用薬による接触皮膚炎を検討する目的で、20年間のパッチテスト結果を検討した。</p> <p>1990年4月より2010年3月までの20年間に昭和大学病院附属東病院皮膚科を受診し、外用薬のパッチテストを施行した316名(男101名、女215名、平均年齢50.1歳)を対象とした。疾患は湿疹・皮膚炎群が277名(87.7%)、うち242名(76.6%)は接触皮膚炎であった。パッチテストは被疑薬剤を健常皮膚に貼付、48時間後に除去した。判定は72時間後にICDRG(International Contact Dermatitis Research Group)基準で+以上を陽性とした。</p> <p>陽性反応は316名中107名(33.9%)に認められ、ブフェキサマク15例、ポピドンヨード13例の順に多かった。5年毎の陽性率の推移ではポピドンヨードの減少、止痒剤の増加が見られた。</p> <p>本研究は薬剤毎のパッチテスト陽性率を比較し時代による陽性率の変化を明らかにすることができた点で新しい知見を得ており、学術上価値があり、学位論文に値すると判断された。</p>			
論文題名：昭和大学皮膚科において1990-2010年に施行された外用薬のパッチテスト結果の解析			
掲載雑誌名：昭和学会雑誌 第73巻 第4号 (平成25年8月) 掲載予定			